

太宰府市の文化財 第46集

大宰府条坊跡XIII

—第56次調査—

1999

太宰府市教育委員会

大宰府条坊跡XIII

—第56次調査—

1999

太宰府市教育委員会

序

本書は、昭和61年度に本市が調査を行いました、大宰府条坊跡における埋蔵文化財の発掘調査報告書であります。

大宰府条坊跡は古代における都市遺跡として全国的にも知られ、市街地のほぼ全体を覆う広大な遺跡です。今回の報告地点はその南側に位置するもので、筑紫野市との境に接する地点であります。

ここからは、奈良時代の建物跡をはじめとする当時の生活を彷彿とさせる遺構や遺物が出土し、当時の都市空間の広がりがかかなり大きなものであったことを物語る貴重な資料となりました。

拙い報告書ではありますが、本書が学術研究はもとより、文化財への理解と認識を深める一助となり、広く活用されることを心より願うものであります。

最後になりましたが、調査に対しましてご理解頂きました地権者の方をはじめ、調査・整理に参加され、ご努力されました方々に心よりお礼申し上げます。

平成11年3月

大宰府市教育委員会

教育長 長野 治己

例言

1. 本書は大宰府市教育委員会が昭和61年度に実施した、大宰府条坊跡第56次調査の発掘調査報告書である。
2. 遺構の実測には、国土調査法第11座標系を利用した。したがって本書に示される方位はG.N.(座標北)を示し、本文中に記される遺構の角度もこれを基準としたものである。
3. 遺構の実測は狭川真一・緒方俊輔が行った。
4. 遺構及び遺物の写真撮影は狭川、調査区全景の空中写真は(有)空中写真稲富が行った。
5. 遺物の実測は境一美、塩地潤一、狭川、図の浄書は狭川が行った。
6. 出土遺物に関するデータ入力及び一覧表の作成は相川寿美子が行った。
7. 本書の執筆及び編集は狭川が担当した。

目次

I. 遺跡の位置と環境	1
II. 調査経過と組織	4
III. 調査報告	6
IV. 成果と課題	22

I、遺跡の位置と環境

太宰府市は福岡平野の南端近くに所在し、北は大城山（標高410m）、東は霊峰宝満山（標高829.6m）とその支脈、西から南西方向にかけては牛頭山、天拝山等に囲まれた東西約3km、南北約2kmの盆地状を呈する小規模平野に位置する。

この平野の北辺にある大城山の頂部には天智朝に築造された大野城跡があり、その西側裾野で平野が最も狭くなっている部分には水城跡がある。さらに南側の盆地を挟んだ対面には基肄城があり、盆地の周囲の山を含めて現在の太宰府市を取り囲むような構造になっている。

さて大城山の裾部には、遠の朝廷と詠われた大宰府政庁跡がある。周囲には蔵司跡、月山官衙群をはじめとする多くの官衙跡が取り巻き、東には学校院跡、さらに観世音寺と当時の官庁、官寺が並んでいる。これらの南側に広がる平野部には、大宰府条坊跡と呼ばれる古代都市遺跡が展開し、隣接する筑紫野市にまで及んでいる。

大宰府条坊跡は御笠川と鶯田川に挟まれた低位段丘上にその主要部分が展開し、縄文晩期から弥生前期にかけての遺構が人間の活動痕跡としての初現を示す。しかしその中心はやはり奈良時代から平安時代にあり、近年の調査・研究の成果によると、奈良時代には幅約36mの朱雀大路を中心に西側ではおよそ100m間隔で南北路が走っていることが判明している。また区画内の様相も分かりつつあり、東西幅100m弱の敷地をおよそ4等分する宅地割りが推定されるまでに至っている。

続く平安時代に至っても奈良時代の街区を一部は踏襲しつつ、東西方向の道路が細かく敷設されるようになる。これらは不整形ながら碁盤目状を呈するもので、11世紀代を中心とする時期の所産と考えられ、『観世音寺文書』に登場する条坊呼称は、この段階の遺構を指していると考えられるのである。また都市の東端には安楽寺が建設され、さらに原山無量寺、有智山寺等の山岳寺院が造営されるのもこの時期と考えられている。

中世に入ると町並みの中心は観世音寺や安楽寺（現在の太宰府天満宮）に吸い寄せられるように東へ集中し、太宰府の都市景観は大きく変貌する。そこには手工業者を中心とした職人の息づかいを彷彿とさせる遺跡が展開し、律令体制から脱却しつつある民衆の活発な活動を窺い知ることができる。

近世には太宰府天満宮の門前町が宰府参りの人々によって活況を呈するようになるが、手工業者も多く残存し、「六座」と呼ばれる組織を形成するまでに成長する。町並みは天満宮を中心に盆地の東側に集中して営まれるようになるが、他の地区では農業経営を基盤とした集落に変貌し、現代の宅地化の波が押し寄せるまでは長閑な田園風景が広がっていたのである。

さて、今回報告する地点は太宰府市の南端部で、筑紫野市との市境近くにあたり、鏡山荘による大宰府条坊推定復原案の右郭十五条二坊に該当し、朱雀大路推定中心から西へ約110～150m、大宰府政庁南門から南へ約1250mの地点に位置する。



Fig.1 調査地位位置図 (1/25,000)

調査当時は周辺部での発掘調査事例もほとんどなく、鷺田川以南一帯の様相は不明と言わざるを得なかった。ただ現在の都府楼田地がある市ノ上遺跡において、奈良時代から平安時代にかけての集落を思わせる遺構がわずかに確認されていた程度である。

その後、現在に至るまでには調査体制も充実したこともあって、かなりの件数を数えるまでに至っている。まず本次調査地の南側隣地を第178次として平成8年度に調査しているのをはじめ、本市の範囲内でも複数箇所を数える。また筑紫野市側の調査も充実してきており、朱雀大路西側溝を検出した第107次・200次をはじめとして多くの地点を掲げることができるようになった。これらの多くの地点で朱雀大路西側一帯を解明する重要な所見を得ており、奈良から平安時代の大宰府を考える上では欠かせぬ地域となった事だけは確かである。

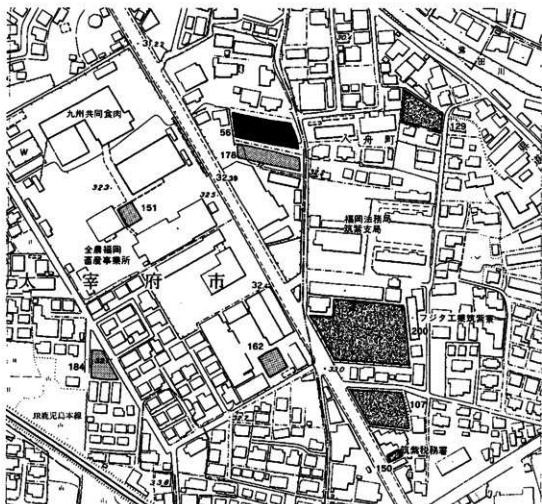


Fig.2 第56次調査地周辺の既発掘調査地点 (1/3,000)

網目：太宰府市調査分 砂目：筑紫野市調査分 数字：調査次数

II. 調査経過と組織

調査地は大宰府市都府楼南5丁目（大字通古賀字立明寺）924-1・3・4にあたる。

当該地点は調査着手前までは小規模な木造家屋が建設されていたが、これらを取り壊し共同住宅を建設するという話が昭和60（1985）年度に持ち上がり、埋蔵文化財の有無について本市に地権者（戸渡邦雄氏）から照会があった。本市では当該地が大宰府条坊跡の一部に該当することから、まず試掘調査を実施して遺構の残存状況を把握することに努めた。試掘調査は昭和61（1986）年2月20日に実施し、山本信夫、狭川真一が担当した。

試掘調査の結果、北側の大半が段落ち状を呈し遺構は確認されなかったが、敷地の南半分には遺構が良好な状態で残存していることが判明し、主として敷地の南側に絞って発掘調査を実施する必要性のあることを地権者に報告、昭和61年度に発掘調査を実施し、その費用は開発者（地権者）が負担することで合意が得られた。その後昭和60年度末に契約を締結し、昭和61（1986）年4月14日～5月20日にかけて現地での発掘調査を実施した。開発対象面積は1366㎡、発掘調査面積は615㎡で、調査は狭川真一が担当した。なお、遺構の基準点測量は九州歴史資料館横田賢次郎氏にお願ひし、遺構実測には緒方俊輔の協力を得た。

遺物整理作業は諸般の事情からかなり遅れて開始され、遺物の実測作業を平成5（1993）年度に行ったほかは平成10（1998）年度に実施した。

以下に各作業当時の調査体制を列記する。

発掘調査（昭和61/1986年度）

総括	教育長	藤 寿人
庶務	社会教育課長	花田勝彦
	文化財係長	鬼木富士夫
	主 事	岡部大治
調査	技 師	山本信夫
		狭川真一（調査担当）
		緒方俊輔

遺物整理作業（平成10/1998年度）

総括	教育長	長野治己
庶務	教育部長	小田勝弥
	文化財課長	津田秀司
	文化財保護係長	和田敏信
	文化財調査係長	山本信夫
	主任主事	藤井泰人
	主 事	今村江利子

調査 技術主査 狭川真一（整理担当）
主任技師 城戸康利 山村信榮 中島恒次郎 井上信正
技 師 高橋 学 宮崎亮一
技師（嘱託） 下川可容子 森田レイ子

（発掘調査参加者）

田中平助 大野謙太郎 八柳健之助 藤原重登 中島タキノ 中島たか子 松島順子
白水いせの 萩尾万寿子 萩尾マキ子 田原智恵子 高原改良子 白木ハルミ 平嶋優子
徳永モモエ 田中テル子 萩尾須磨子 萩尾カネ子 大迫フミ子 中嶋はじめ 江島スミエ

（整理作業参加者）

林美知子 中村房子 境一美 相川寿美子

塩地潤一（本市技師・現大分市教育委員会）

なお、調査及び整理に際して次の方々のご協力を得た。記して感謝いたします。

（順不同・敬称略）

横田賢次郎（九州歴史資料館） 渡邊和子（筑紫野市教育委員会）

III. 調査報告

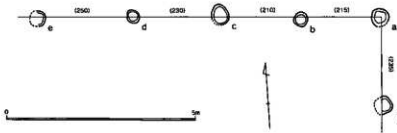
(1) 遺構・層位の状況

試掘調査の結果から敷地の南半部に寄せて調査区を設定したが、北側の段落ちに関わる年代の決定や規模の把握などが可能な程度に北へ拡張した。

遺構面は地山である明黄茶色粘質土に直接穿たれるかたちで検出されたが、その上面には一部を除いてほとんど包含層は残存しておらず、表土を除去するとすぐに遺構面が顔を出す状況であった。包含層は茶色土で構成され、遺構の残存率の高かった東側に確認されたに留まる。

検出した遺構は掘立柱建物や棚列、土坑などであったが、そのほとんどが奈良時代に帰属するもので、それ以前及び以後の遺構はきわめて希薄であった。また最近まで生活空間として利

56SB080



56SB100・56SA070

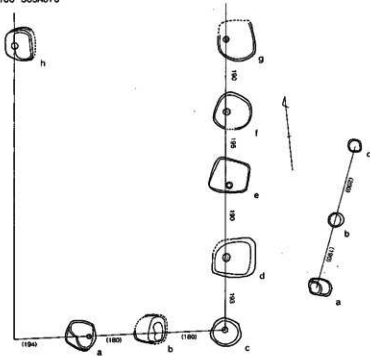


Fig.3 56SB080・100・56SA070実測図 (1/100)

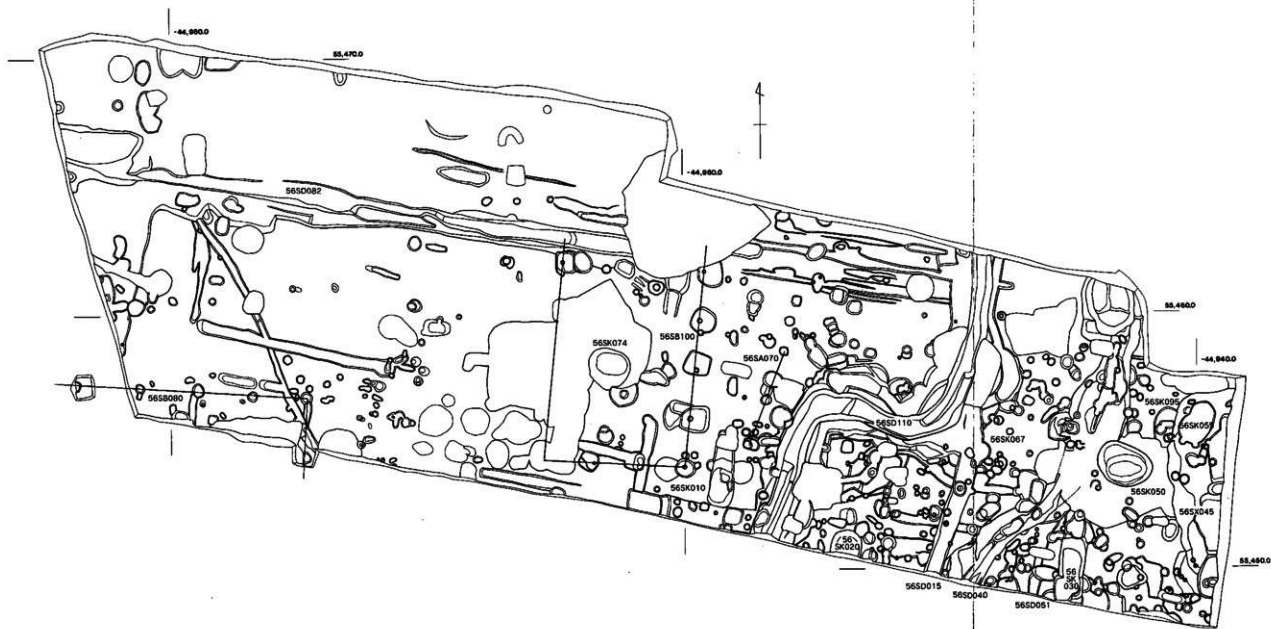


Fig.4 第56次調査遺構配置図 (1/150)

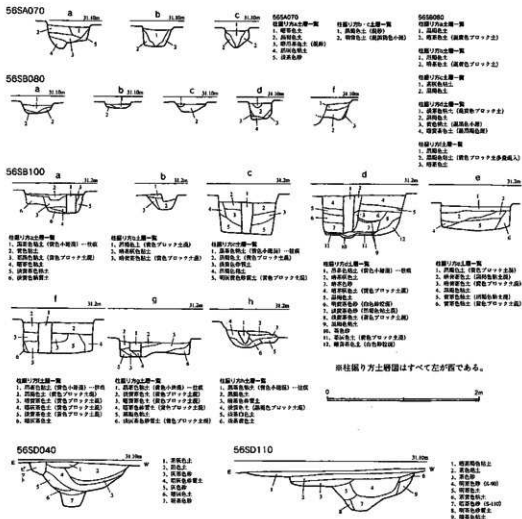


Fig. 5 56SA070・56SB080・100・56SD040・110土層観察図 (1/50)

用されていたこと、表土から遺構面までの深さがきわめて浅いこと等が重なって、調査区の随所に植木を掘り取ったような穴や家畜の墓などの攪乱がみられ、それらによって破壊が進行しており、全体の形状が知れる遺構が少なかったのは残念であった。

(2) 検出遺構

今次の調査では横列1条、掘立柱建物2棟、土坑8基、溝5条のほか段落ちやピット群が検出された (Fig. 4)。以下に主要な遺構について報告する。

欄列

56SA070 (Fig. 3・5, Pla. 3・6) 調査区中央付近で検出された南北2間の欄列で、主軸の振れはN-21° 10' -Eと大きく東に振れている。柱間は南から約2.00・1.90mで、柱掘り方は円形ないしは隅丸の方形で、長さ0.35~0.6m、深さ0.25~0.35mを測る。掘り方b・cでは、上部から

掘り込まれたような砂混じりの黒褐色土が確認され、その形状から柱を抜き取った可能性も考えられる。なお、北側へ2mの位置に同規模のピットがあり、これを含めると柱間3間となるが、やや柱筋がずれており今回は2間の橋列として報告しておく。

掘立柱建物

56SB080 (Fig.3・5, Pla.2・6) 調査区南西隅で検出された南北1間以上、東西4間以上の掘立柱建物で、主軸の振れはN-93° 25' -Eと若干東に振れている。柱間は南北が2.35m、東西方向が東から約2.15・2.10・2.30・2.50mとなっている。柱掘り方は略円形を呈し、径0.3～0.5m程度、深さ0.1～0.25mを測る。明確な柱痕跡を見いだすことはできなかった。

56SB100 (Fig.3・5, Pla.3～5) 調査区中央付近で検出された東西3間、南北4間以上の掘立柱建物で、主軸の振れはN-6° 05' -Eと若干東に振れている。随所に攪乱があり西の柱列の大半と、段落ちによって北側の全部を失っている。確認できる柱間は、東西方向が1.80m等間、南北方向は南から1.93・1.90・1.95・1.90m (平均で1.92m) となっている。柱掘り方は隅丸の不整形ないしは略円形を呈し、検出面では不揃いである。規模は長さが0.8～1.1m、深さ0.35～0.60mを測る。殆どの掘り方で柱痕跡が確認でき、柱径は0.13～0.18m (0.15mが最も多い) である。

土坑

56SK010 (Pla.9) 56SB100・56SA070のちょうど中間に位置する。北側及び東端の一部を攪乱で破壊されているが、隅丸長方形を呈する土坑で、長さ2.83m、幅0.92m、深さ0.2～0.3mを測り、南半分が深くになっている。埋土は黒褐色土で構成され、南側がやや黒色味が強い。土坑の主軸はおおよそN-8° -Eで、近接する56SB100に近い。

56SK020 調査区の南端で検出され、遺構の大半は調査区外に延びている。検出長1.0m、幅1.22m、深さ0.6mを測り、埋土は黒褐色土で構成される。

56SK030 (Pla.9) 周囲を他の遺構に切られており、全体の形状は知り得ないが、56SK010に近似する形状を呈していたものと想定される。現状での検出長は1.7m、幅1.0m、深さ約0.5mを測る。埋土は黒褐色土で構成される。遺物取り上げに際して便宜的に南・北・下に分層したが、実際には分層できるものではなく、ここではまとめて報告した。

56SK050 上面を大きな攪乱で失うが、攪乱埋土を除去するとほぼ全体の形状が残されていた。土坑は不整形円形を呈するもので、長さ2.2m、幅1.65mで、底部は2段になっており深さは0.35～0.7mを測る。埋土は黒褐色土である。

56SK055 56SX045窪み状遺構の埋土を除去した段階で検出された土坑で、不整形円形を呈し、長さ1.75m、幅0.15m、深さ0.1mを測る。埋土は黒褐色土である。

56SK067 56SD015を切る窪み状の土坑である。他のピット群とも切り合いがあるが、検出段階の形状は不整形円形を呈していた。長さ0.6m、幅0.5m、深さ0.15mで、埋土は黒灰色土である。

56SK074 調査区中央部の巨大な擾乱を除去した段階で検出された土坑である。形状は略円形を呈し、長さ1.6m、幅1.55m、深さは最大で0.65mを測り、埋土は黒褐色土である。56SB100の中央南寄りに検出されたが、切り合い関係はなく、出土遺物もほぼ同時期の範囲内であり、両者の前後関係を掴むことはできなかった（同時併存の可能性も残される）。

56SK095 擾乱及び56SX045に切られており、全体の形状は判明しない。またその復原される形状から推定すれば、56SK055と重複していた可能性もあるが56SX045の存在によって明確にはできなかった。遺構は長さ1.55m、幅0.8m以上、深さ0.15m内外を測る。56SX108ほか遺構内に確認されるピットは埋土除去段階で検出されたものであり、同時にしくは以前のものである。

溝

56SD015 (Pla.7) 調査区東寄りで検出された南北溝である。遺構の一部を擾乱で失うほか、56SK067や新期の溝状遺構に切られている。擾乱によって直接の前後関係は知られないが、56SD110よりも先行するものとみられる。また北側の延長部は段落ちによって切れ、南側は調査区外に延びているため全長は明らかではない。遺構は東側に張り出すように湾曲し、南半部ではN-18°-E、北半部ではN-6°-W程度を示している。検出長11.5m、幅0.7m内外、深さ0.2~0.25m程度を測る。埋土は黒灰色土である。なお、溝底の標高は北側に向かって深くなる傾向がある。

56SD040 (Fig.5, Pla.7) 56SD015の東側に検出された大きく蛇行する略南北溝で、中央付近を擾乱で失い、随所に擾乱やピットが切り込んでおり、当初の形状は把握しにくい。検出全長は約14mで、残存状態のよい南半部では幅1.15~1.6m、深さ0.5~0.55mを測る。溝底が一段深くなる部分もある。埋土はFig.5の土層図に示すような盆状堆積で、溝底の標高は南側に向かって深くなる傾向がある。

56SD051 検出長3.6m、幅0.3~0.45m、深さ0.1m程度の小溝で、北側を擾乱で失っている。擾乱以北の状況はわからない。ピット1個を介して56SD040より新しいことが分かる。

56SD082 北側の段落ちの裾部分で検出された東西方向の溝である。段の落ち際を意識して穿たれたことは確実で、段落ちに伴うものと判断できる。溝は中央にある大きな擾乱よりも以西に検出され、検出長22.5m、幅0.8m、深さ0.15m内外を測る。埋土の主体は茶灰色土に黄色粘土ブロックが混在するもので、締まりが悪く一見して新しい時期のものと判別できた。擾乱より以東には明確な形では延びないが、小溝数条が確認され同じ性格、機能を有していたものと考えられる。

56SD110 (Fig.5, Pla.3・8) 調査区中央東寄りを南北に蛇行しながら穿たれる溝である。検出段階では暗茶褐色粘土、茶色粘土の良く締まった堆積層と判断され、そのプランも明瞭ではなかったが、これらの土層を除去すると明茶色砂を基本層位とする溝状プランが確認された。さらにこれを除去すると暗茶色砂を基本とする溝が確認された。溝は厳密には3時期の掘りか

えがあり、北部にある擾乱付近で大きく東へ張り出す時期が、これらの中間の時期に位置するものと考えられる。

検出全長は約18m、幅は最下層のもので0.8~1.1m、深さは遺構面から0.3~0.4mを測る。溝底は凹凸が著しく標高の差異は見出しにくい、北半部では北に向かって低くなる傾向がある。埋土中からは黒曜石の剥片が出土したに留まる。

その他の遺構

56SX023 長さ0.62m、幅0.45m、深さ0.35mの不整隅丸方形を呈するピットである。新期の溝に切られるほかは目立った切り合い関係は有しない。埋土は茶白色粘質土。

56SX025 調査区南端で56SD040に近接した位置にあるピットで、南側は調査区外、東側は他のピット(S-28)に切られていて本来の形状は不明である。現状では径0.5m内外の略円形と想定され、深さは0.4mを測る。

56SX032 56SK033を切る土坑状の窪みで、南側が調査区外に延びている。検出長0.5m、幅1.6m、深さ0.4mを測る。

56SX033 56SK030を切る土坑状遺構で、周囲をさらに新しい遺構で切られている。また遺構の南半部は調査区外に延びており全体の形状は知り得ない。現状での検出長1.0m、幅0.7m、深さ約0.5mを測る。埋土は黄色ブロックを多く含むもので、他の遺構の状態と比較すると出土遺物の時期よりも新しく捉えるのが妥当かも知れない。

56SX035 56SK030の東側にあるピットで、略楕円形を呈するものである。長さ0.65m、幅0.45m、深さ0.35mを測る。隣接するピット(S-34)より新しい。

56SX037 不整形な土坑状を呈する遺構で、長さ1.2m、幅0.8m、深さ0.45m程度を測る。

56SX043 56SK033・56SX032に切られるピットで、当初は径0.7m程度の略円形を呈していたものと考えられる。深さは現状で0.15m。

56SX045 調査区の東側で検出した大きな窪み状の遺構で、調査区のほぼ南北を貫通し、さらに東側の調査区外に延びている。検出長9.7m、幅2.2m以上、深さ0.2m内外である。埋土は茶色土の単一層で構成されており、埋土を除去すると多くの遺構が残存していた。56SK095を切っていることから自然の堆積あるいは包含層とは考えにくい。

56SX108 56SK095の埋土を除去した段階で検出されたピットである。略円形を呈し、径0.45m、深さは土坑底から0.15mである。

(3) 出土遺物

A：土器・陶磁器

掘立柱建物出土土器

56SB080出土土器 (Fig.6、Pl.10)

須恵器

蓋3 (1) 端部を三角形に作るが不明瞭である。体部はヨコナデされる。柱振り方b出土。

坏c (2・3) 高台径7.2・8.0cm。2の底部はヘラ切りされる。体部はヨコナデである。2は柱振り方b、3は柱振り方a出土。

灰軸陶器

椀 (4) 高台径7.0cm、外面の調整はヨコナデで、底部に四角形で小さめの高台が貼り付けられる。釉は内面に厚めにかかり、淡緑色に発色するが斑がある。外面の釉は、粉末が飛散したような状況で観察される。K-14タイプか。柱振り方c出土。



Fig.6 56SB080出土土器
実測図 (1/3)

土坑出土土器

56SK010出土土器 (Fig.7, Pla.10・11)

須恵器

蓋1 (2) かえりを有する口縁部片で、天井部は回転ヘラケズリとみられる。

蓋3 (1) 口径18.0cmで、口縁端部を明瞭な三角形に作る。天井部はヨコナデが最終調整であり、切り離し法及びその後の調整は明らかでない。

坏c (5~7) 5・6は外方に張り出す高台を有し、径10.0・10.8cm。7は四角い高台を有するもので、体部と底部の境目を丸く仕上げている。6・7ともに底部は回転ヘラケズリされる。

坏 (3) 口径14.2cmで、体部はヨコナデされる。

皿 (4) 口径15.6cmで、体部はヨコナデされる。

土師器

甕 (8~10) 8・9は口径30.8・32.0cmで、内面はヘラケズリされる。8の外面はハケ目である。9は底部片で内外面ともにハケ目が観察される。

製塩土器

甕 (11) 口径15.8cm。口縁部はヨコナデされ、体部外面は平行叩き、内面は叩き目に類似した当て具痕が観察される。強い火熱を受けたようで胎土がかなり脆くなっている。

焼塩甕 (12) 鉢形を呈するもので、外面には指圧痕がみられる。IIb類。

56SK020出土土器 (Fig.7, Pla.12)

須恵器

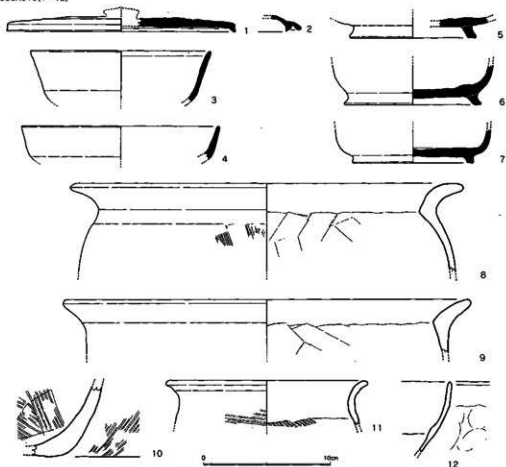
蓋c3 (13) 口径14.6cmで、口縁端部を明瞭な三角形に作る。天井部は回転ヘラケズリされ、体部はヨコナデである。

小坏c (14) 高台径7.0cmで、底部はヘラ切りの後ナデである。

坏c (15) 口径12.4cm、器高5.2cm、高台径9.0cmで、底部はヘラ切りの後ナデである。高台は外方へ張り出す形状を呈し、底部と体部の境目は丸く仕上げられる。

土師器

56SK010(1~12)



56SK020(13~16)

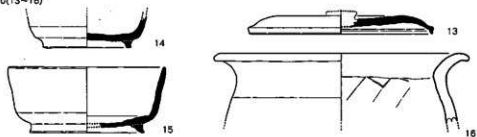


Fig.7 56SK010・020出土土器実測図(1/3)

甕(16) 口径20.0cm。体部内面はヘラケズリされる。

56SK030出土土器 (Fig.8, Pla.12・13)

須恵器

甕2(1) 口縁端部の折り返しは、長めの三角形を呈するものである。

甕3(2・3) 3は口径16.2cmで、天井部を回転ヘラケズリする。両者とも口縁端部を明瞭な三角形に作る。

坏c(4~6) 4・5は高台が外方に張り出すもので、5の体部外面下半にはカキ目状の強いヨ

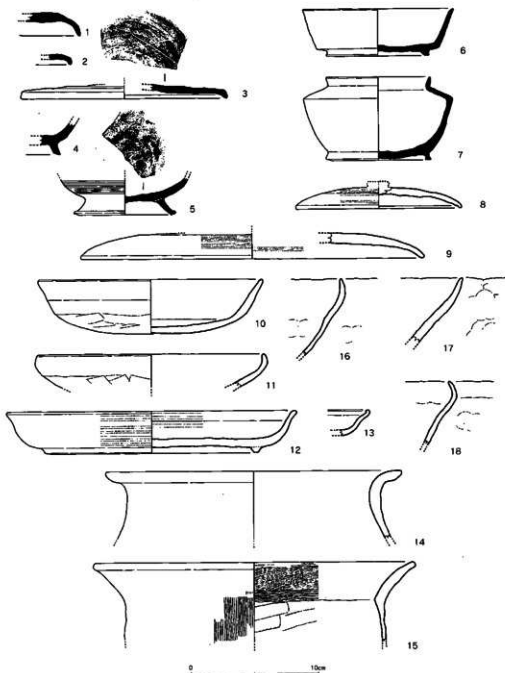


Fig.8 56SK030出土土器実測図 (1/3)

コナデが施される。6は口径11.8cm、器高3.8cm、底径8.2cmで、小さめの高台ながらわずかに外方へ張り出すものである。底部は回転ヘラケズリされる。

短頸壺 (7) 口径8.2cm、器高6.6cm、高台径8.2cm、胴部最大径11.6cmを測る。肩部が張り強い稜線が入る。体部は全面的にヨコナデで終わるが、外面の下半には先行して回転ヘラケズリが行われた形跡がある。

土師器

壺c3 (8) 口径13.0cm。口縁端部は丸くおさめられ、内面に沈線状の軽い段がある。天井部は回転ヘラケズリされ、回転ヘラミガキが部分的に残存している。

大壺4 (9) 口径27.0cmに復原される。天井部は回転ヘラケズリされ、内外面ともに回転ヘラミガキが施される。高坏もしくは皿の可能性も残される。

坏a (10) 口径17.6cm、器高4.3cmを測る。内面の口縁端部付近に浅い幅広の沈線が走り、外面底部は手持ちのヘラケズリが施される。

皿b (11) 口径18.2cmで、口縁部を内湾させ、体部外面下半をヘラケズリする。

皿c (12) 口径22.8cm、器高3.4cm、高台径16.8cm。外面全体に回転ヘラミガキが施される。

皿 (13) 口縁端部を小さく内側に折り返すものである。かなり風化が進んでおりヨコナデ以外の調整は観察し難い。体部内面上位に赤色顔料の塗布痕跡がみられる。都城系。

甕 (14・15) 14は体部と口縁部の境目が不明瞭なもので、胎土中に微細な角閃石を多く含んでいる。筑後産とみられる。口径23.2cm。15は口径25.2cmで、体部外面はハケ目、内面はヘラケズリを施す。口縁部内面は目の細かなハケ目が施される。

製塩土器

焼塩壺 (16~18) 鉢形を呈するもので、外面に指圧痕がみられる。18は口縁部を大きく内湾させる。いずれもIIB類。

56SK050出土土器 (Fig.9, Pla.14)

須恵器

壺c (1) 扁平なボタン状の摘みを取り付く天井部は、回転ヘラケズリされる。

壺c3 (2・3) 口径13.8・13.4cm。2は器高1.5cmで天井部は回転ヘラケズリされ、宝珠形の摘みを取り付く。3も天井部は回転ヘラケズリで、摘みが貼り付けられていた形跡がある。

坏c (4) 口径14.2cm、器高4.9cm、高台径10.0cmを測る。底部は回転ヘラケズリされ、体部はヨコナデである。体部内面にヘラ記号がみられる。

土師器

壺3 (5) 口径13.4cm。口縁端部は丸味を帯び、内面に沈線状の軽い段が観察される。体部は内外面ともに回転ヘラミガキを施す。

皿a (6) 口径23.4cmと大きなもので、高坏の坏部もしくは大蓋の可能性も残る。底部は回転ヘラケズリされ、体部は内外面ともに回転ヘラミガキを施す。

56SK055出土土器 (Fig.9, Pla.14)

須恵器

坏c (7) 口径14.8cm、器高2.8cm、高台径11.2cmを測る。底部と体部の境目は明瞭で、ちょうどその付近に高台が貼り付けられる。底部は回転ヘラケズリされる。

土師器

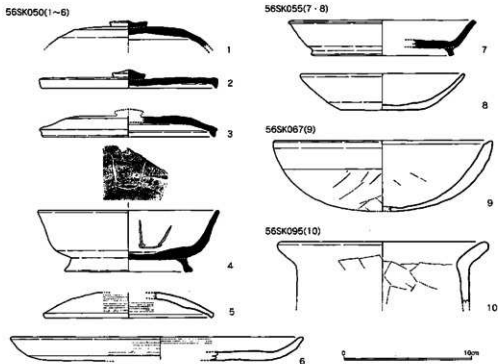


Fig.9 56SK050・055・067・095出土土器実測図(1/3)

坏d(8) 口径13.0cm、器高2.9cm、底径6.6cmを測る。表面は風化が進行し、調整は不明である。

56SK067出土土器 (Fig.9, Pla.14)

土師器

碗(9) 口径19.2cm、器高5.6cmを測る。体部外面の大半はヘラケズリされ、口縁部付近のみヨコナデである。内面は平滑にされ、工具の当たりのような痕跡がわずかに観察される。内面及び外面上位の一部は赤褐色を呈している。

56SK095出土土器 (Fig.9, Pla.15)

土師器

甕(10) 口径16.6cm。口縁部はヨコナデ、体部外面はハケ目と思われ、内面はヘラケズリである。

清出土土器

56SD040出土土器 (Fig.10, Pla.15)

土師器

柄c(1) 高台径7.6cm。底部はヘラ切りされ、板状圧痕が観察される。

弥生土器

甕(2) 口径20.4cm。体部外面はハケ目、内面はナデである。

56SD082出土土器 (Fig.10, Pla.15)

白磁

皿 (3) 高台径4.1cmで疊付けは露胎である。見込みには幅2cmで輪状に白濁色の附着物が観察され、目跡とみられる。軸は濁白色に発色し、光沢がある。

青磁

小碗 (4) 口径6.5cm。軸は残存部の全面にきわめて厚くかかり、暗緑灰色に発色し光沢がある。

染付

小壺 (5) 高台径4.9cmで、疊付け及び内面には施釉されない。体部外面中程に淡青色の呉須による施文がある。内面はヨコナデである。

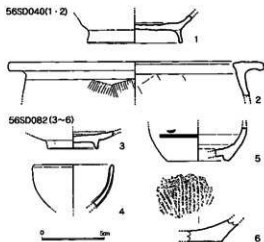


Fig.10 56SD040・082出土土器実測図 (1/3)

陶器

摺り鉢 (6) 外面底部の隅は使用によって軸が剥落するが、他の部位には暗茶褐色で光沢のない軸が薄くかかる。内面は縦方向のクシ目 (8本単位か) を入れ施軸するが、使用による磨耗が著しい。

その他の遺構出土土器

56SX023出土土器 (Fig.11)

土師器

坏a (1) 口径13.0cm、器高4.1cm、底径5.5cmで、底部はヘラ切りされる。

56SX025出土土器 (Fig.11、Pla.15)

土師器

碗a (2) 口径14.0cm、器高4.4cm。口縁部をわずかに外反させる。調整は風化が進行し明らかではない。

越州窯系青磁

坏 (3) 口径15.6cm、器高4.5cm、高台径6.6cmを測る。口縁部は大きな切り込みによって12弁の花弁状に作り、外面の弁間には一つおきに縦方向の沈線を入れる。見込みには細長い目跡が観察される。軸は疊付け以外に施され、淡茶緑色に発色し光沢がある。I類。

56SX032出土土器 (Fig.11)

須恵器

查壺 (4) 口径14.6cm。体部はヨコナデされ、天井部は回転ヘラケズリされる。

56SX033出土土器 (Fig.11、Pla.16)

須恵器

蓋3 (5・6) 口径14.0・14.8cm。口縁端部を三角形に作る。6の天井部はヘラ切りのままである。

鉢 (7) 底径16.0cmに復原される。体部外面下位に回転ヘラケズリがみられるほかはヨコナデである。

土師器

蓋3 (8) 口径13.4cm。風化が進行するが、内面の一部に回転ヘラミガキが観察される。

56SX035出土土器 (Fig.11、Pla.15)

土師器

坏d (9) 口径14.0cm、器高3.1cm、底径7.4cmで、体部外面下半から底部は回転ヘラケズリされ、底部を除く全面に回転ヘラミガキを施す。

56SX037出土土器 (Fig.11、Pla.16)

須恵器

蓋c3 (10) 口径15.2cm。天井部はヘラ切りのままである。

碗 (11) 体部はヨコナデされる。

56SX043出土土器 (Fig.11、Pla.16)

須恵器

蓋3 (12) 口径15.0cm。天井部は回転ヘラケズリされたものとみられる。

土師器

蓋c (13) ボタン状の摘みを取り付く。体部には回転ヘラミガキが観察される。

蓋3 (14) 口径18.0cmに復原される。体部及び内面底部に回転ヘラミガキが施される。皿または高坏の可能性も残る。

56SX045出土土器 (Fig.11、Pla.16・17)

土師器

小皿a (15・17) 口径10.8・12.3cm。風化が進行し調整は明らかではない。

小皿a2 (16) 口径11.0cm、器高1.1cm、底径6.5cm。風化が進行し調整は明らかではない。

碗c (18) 高台径9.0cm。風化が進行し調整は明らかではない。

黒色土器

碗c (19・20) 両者ともA類で、高台径8.0cm。内面はヘラミガキされるとみられるが、風化が進行し観察できない。

越州窯系青磁

碗 (21~23) 21は蛇目高台とみられ、その径6.0cmを測る。I-1類。22は外反する口縁部を有するもので、I-2類。23は直立する口縁を有し、1mm前後の黒斑を多く含む胎土でII類とみられる。

56SX108出土土器 (Fig.11)

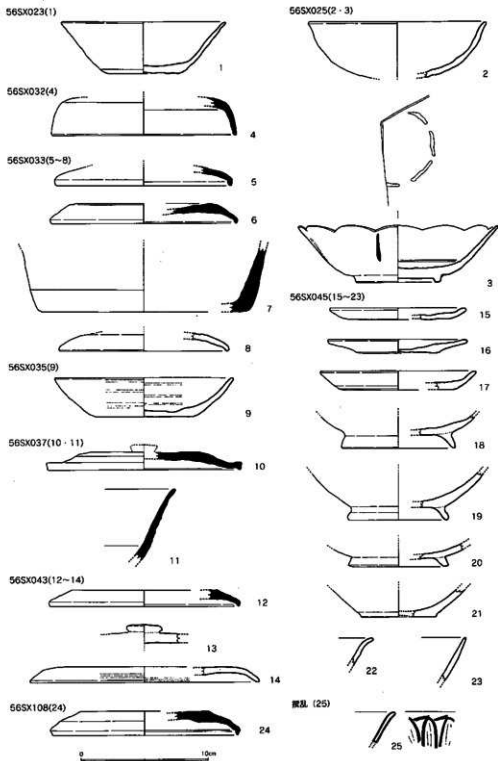


Fig.11 その他の遺構・攪乱出土土器実測図 (1/3)

須恵器

蓋3 (24) 口径14.5cm、天井部径10.2cmで、口縁端部は明瞭な三角形を呈し、天井部は回転ヘラケズリされる。

攪乱出土土器 (Fig.11, Pla.17)

龍泉窯系青磁

椀 (25) 外面に肉厚ながら細身の蓮弁文を配する。間弁はヘラの片切り彫りでわずかに表現するに留まる。釉は淡緑灰色に発色し、光沢がある。胎土は微細な白色及び黒色の粒子を若干含むものである。IV類と考えられる。

B: 石製品

砥石 (Fig.12, Pla.17) 暗灰色を呈する泥岩製とみられ、両端を失う。現存長8.5cm、最大幅3.3cm、厚さ1.1~1.3cmを測る。図の右側面は自然面ながら風化が進行しており、使用当時の面と考えられる。他の面は研磨され、使用面であったことがわかる。56SD110上面に被る暗茶褐色土層 (S-60) から出土した。

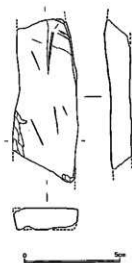


Fig.12 第56次調査出土
石製品実測図 (1/2)

IV. 成果と課題

掘立柱建物及び欄列はいずれも方向を大きく異ならせるもので、柱掘り方の規模についても三者三様であり、一見する限り同時に存在したとは考えにくい状況である。ただ出土遺物をみる限りでは、56SA070・56SB080が8世紀後半（56SB080柱掘り方_cから出土した灰釉陶器の年代の帰属が問題として残るが）、56SB100が8世紀代と捉えられ、掘土の状況や個々の許容幅を考えると三者が同時に存在していた可能性は捨てきれない。

これらの建物の周辺に展開する土坑やピットについては、56SK055・56SX033が8世紀後半に考えられる程度で、多くが8世紀前半から中頃に位置づけられる。掘土は掘立柱建物、土坑ともに類似するが、年代的には建物と土坑との関連は見出しにくい。しかし56SK010・030はともに南北に長い形状を呈し、その主軸が建物の振れに近似することは注意しておく必要がある。

溝遺構の主要なものは、南北方向のものが3条確認されておりそのうち東側の56SD040は中程を擾乱に分断されるが、蛇行しながら調査区を縦断していたことが分かる。出土遺物から平安時代まで下るものである。その西側に存在する56SD015は出土遺物から奈良時代の範疇で捉えられるものである。調査区の東端付近に条坊右郭一坊推定線が通過するが、遺構自体が蛇行する点や振れが大きく東に傾いている点、任意の中心（X 55,451.0、Y -44,949.85）と政庁中軸線との距離が116.53mとなり、従来から知られている右郭一坊路の西側溝までの距離（約100m）よりも大きく西に偏している点、さらに対になる側溝が存在しないなどの点から、条坊区画に直接関係するものとは考えられない。ただ、この溝より西側に掘立柱建物が見られるのに対して、同時期もしくは近接する時期の土坑が溝より東側に多く見出せることは、この溝が宅地内における何らかの区画を示す可能性がある。今後の課題とするべきものである。

また各溝の流れの方向が同一ではなく、56SD015・110が北（調査地の北側約100mの地点には鷺田川が流れている）に向かって流れていた可能性が強いのに対して、56SD040はこれらとは逆に南へ向かって流れていたことが考えられる。平安期に入って周辺部を含めた土地利用の形態が変化したことを窺わせるものであろうか。

さて、奈良時代以外の状況を見てみると、先の56SD040のほかには56SX023が9世紀中頃に降とみられ、他に若干のピット群が平安時代と考えられる程度である。出土遺物を見ても平安期のものはきわめて少なく、中世に属する資料も皆無に等しい。時期差による土地利用の変化には著しいものが看取される。

また北側の段の落ち際に穿たれた（段に平行する）東西方向の溝から出土する遺物は、すべて近世以降の所産であり、この段落ちが形成された時期の一端を窺わせるものである。おそらくはこの付近が近年の宅地開発以前の姿（水田や畑）になった時期を示唆するものであろう。

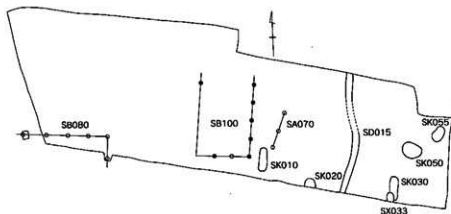


Fig.13 奈良時代の主要遺構配置図 (1/400)

最後に、今次の調査で検出された最古の遺構と考えられるS6SD110について記しておく。この溝は鋸形に折れ曲がるもので人為的に穿たれた可能性が強い。途中で若干のルート変更はあるものの掘り直し (S-90) が確認され、ある一定期間機能していたことが窺える。最終的には暗茶褐色粘土・茶色粘土が覆いつくし (S-60)、奈良時代の遺構の一部はこの上から切り込んでいた。かなり丁寧に整地された可能性が考えられる。遺構からの出土遺物は黒曜石の剥片を数点検出しただけで、年代を決定できる要素はきわめて乏しいが、弥生時代まで遡る可能性も考えておく必要がある。

なお南側隣接地を平成8年度に第178次調査として実施している。ここでは東西方向の溝が数条確認され、奈良時代から平安時代にかけての区画が存在したことが判明した。この調査成果を踏まえて、本調査地も将来再度検討を行う必要がある。

Tab.1-1 第56次調査検出遺構一覧表(1)

S-番号	遺構番号	種別	地区
1		溝状 淡灰色土埋土	近世～ I14ほか
2		ピット 80→2	近世～ I15・16
3		溝 黒褐色土埋土 3→1・2	奈良？ I15ほか
4		ピット群 黒褐色土埋土	奈良？ H14・15
5		ピット 110→5	奈良？ I9
6		攪乱	I12・13
7		ピット群 淡灰色土埋土	I10
8		ピット 黒褐色土埋土	奈良？ I10
9		ピット 茶色土除去後のピット	奈良？ J9
10	56SK010	土坑 黒褐色土埋土、S-10下は下部の窪みを示す	8c前半 I9
11		攪乱群	J8ほか
12		ピット	I8
13		攪乱群	I7
14		ピット群	平安 I16・7
15	56SD015	溝 黒灰色土埋土	奈良 6ライン
16		窪み 15→16	奈良 J7
17		小溝 淡灰色土埋土 17→15・18	I6・7
18		ピット群	奈良 J6
19		ピット	奈良？ I6
20	56SK020	土坑 黒褐色土埋土	8c前半 J7
21		攪乱 家畜(猫)の糞	J7
22		ピット群 切り合いで新しいものも混じる	平安？ J7
23	56SX023	ピット 茶白色粘質土埋土、柱穴？、23→17	9c後半 J6
24		ピット	J7
25	56SX025	ピット	X期前後 J6
26		窪み	新 I7
27		ピット	新 I8
28		窪み 28→25	平安 J5
29		ピット群	平安 J5
30	56SK030	土坑 黒褐色土埋土、S-30北・南・下に分けるが同一	8c前半 J5
31		ピット 31→33→43→44→30	新？ J5
32	56SX032	窪み	平安 J5
33	56SX033	土坑状 埋土に黄色粘土ブロック多く混入、33→30	8c後半 J5
34		ピット群	奈良 J4
35	56SX035	ピット 34→35	8c後半 J4
36		窪み	中世～ J4
37	56SX037	窪み 37→47	8c後半 J4
38		ピット群	奈・平 J4
39		ピット群	奈良 J4
40	56SD040	溝 黒褐色土埋土	平安 J6ほか
41		ピット	平安～ J3
42		ピット群 42→41	平安～ J3
43	56SX043	ピット 黒色埋土、31→33→43→44→30	8c後半 J4
44		ピット 暗茶色埋土	平安？ J4

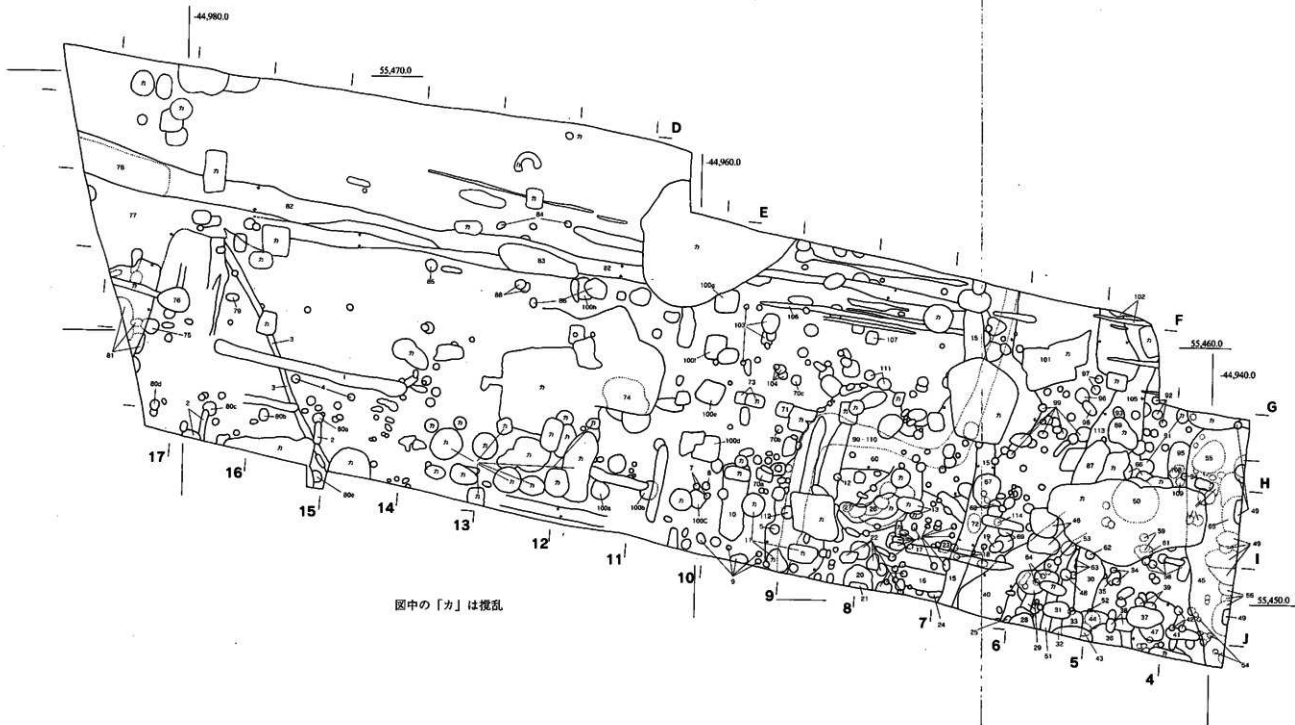


Fig.14 第56次調査遺構略測図及び遺構仮番号配置図 (1/150)

Tab.1-2 第56次調査検出遺構一覧表(2)

S-番号	遺構番号	種別	地区
45	56SX045	落ち込み 茶色土壌土、南北に分けるが同一埋土	X・XIか 3ライン
46		ピット群	新 I5
47		ピット 37→47	奈良? J4
48		ピット	J5
49		ピット群 45→49	新 H13
50	56SK050	土坑 黒褐色土壌土	8c中頃 I4
51	56SD051	小溝 31→51→40	10e J5
52		ピット 30→52	奈良 J4
53		ピット 40→53	奈良 I5
54		ピット群 54→45	奈良? J3
55	56SK055	土坑 55→45	8c後半 H3
56		ピット群 56→45	平安 3ライン
57		ピット群	平安 I3
58		ピット群	平安? IJ3
59		ピット群 黒褐色土壌土	奈良? I4
60		埋積層 暗茶色粘質土ほか強土、56SD110の最上面に被る	奈良? H7・8
61		ピット 59→? 61→58	奈良? I4
62		ピット 黒褐色土壌土	奈良 J5
63		ピット群 30→? 63	奈良 J5
64		ピット群 29→64	奈良? J5
65		窪み 上面をカットされる。 45→65	奈良 I3
66		ピット群 茶灰色土壌土	奈良 H4
67	56SK067	土坑 黒灰色土壌土	奈良 I6
68		ピット 67→68	奈良? I6
69		ピット群	奈良 I6
70	56SA070	欄列 南からa・b・c	奈良 9ライン
71		ピット 古い?	H9
72		ピット 15→72	奈良 I6
73		ピット群	新 H9
74	56SK074	土坑 黒褐色土壌土、上面攪乱で尖う	奈良 H11
75		ピット 黒褐色土壌土、柱掘り方?? 76→75	奈良 G17
76		攪乱	G17
77		窪み	近世～ EF17
78		土坑?	近世～ EF17
79		ピット	奈良? G16
80	56SB080	独立柱建物 a-f、4間以上×1間以上	8c後半 Hライン
81		ピット群	近世～ H17
82	56SD082	溝 段落ちに伴うもの	近世～ フライン
83		溝の一部 段落ちに伴うもの	近世～ フライン
84		ピット群	F12
85		ピット 黒褐色土壌土	奈良 F13
86		ピット群 淡灰色土壌土	近世～ G12・13
87		攪乱 動物(牛)の墓	新 H5
88		ピット群 黒褐色土壌土	G12

Tab.1-3 第56次調査検出遺構一覧表 (3)

S-番号	遺構番号	種 別		地区
89		複乱	動物(牛)の墓	新 H4
90	(56SD110)	溝	掘り直されたもので最新	弥生? HI7・8
91		ピット		新 H4
92		ピット群		奈良? H4
93		ピット	89→93	奈良 H4
94		ピット	黄色粘土埋土、95→94	奈良? H4
95	56SK095	土坑	95→94	奈良? H3・4
96		ピット	黒褐色土埋土	奈良? G5
97		ピット群		奈良? G5
98		ピット		奈良? H5
99		ピット群		奈良? H5
100	56SB100	擬立柱建物	3×4間以上、a~h、複乱で多くを失う	奈良 10・119/2
101		複乱	黒色埋土、遺物きわめて少ない	新 G5
102		小溝		新 F4
103		ピット群		平安 G9
104		ピット群		奈良? H9
105	(56SD040)	溝	複乱で分断されるが、SD040と同一と判断	平安? H4ほか
106		溝	S-82に同じ	近世~ Gライン
107		ピット	茶白色粘質土埋土、古いか?	G7
108	56SX108	ピット	95→108・109	奈良? H3
109		ピット	95→108・109	平安 H3
110	56SD110	溝		弥生? J8ほか
111		ピット群	黒褐色土埋土	奈良? G7
112		ピット		新 I8
113		ピット		奈良? H4
114		ピット		平安 I6

Tab.2 大宰府発跡第56次調査
出土遺物一覽表

S-1

須恵器	甕3、坏c、甕
土師器	破片
陶産磁器	破片(近世)
杂付(輸入)	破片(青花)
石製品	黒曜石
瓦	瓦

S-2

須恵器	甕、坏×甕
土師器	破片
陶産磁器	破片(近世)

S-3

土師器	高坏脚、甕
-----	-------

S-4

須恵器	甕
土師器	破片

S-5

須恵器	甕、破片
土師器	甕、破片

S-6

須恵器	甕、甕3、破片
土師器	破片
靑銅器	赤青磁 筒：IV (1)
杂付(輸入)	破片(青花)

S-7

土師器	破片
-----	----

S-8

土師器	甕
-----	---

S-9

須恵器	坏
土師器	高台片
黒色土器A	破片
越州麻糸青磁	筒：II

S-10 (56SK010)

須恵器	坏c、甕3、甕e?
土師器	甕、甕?、甕3
	焼塩甕
土製品	土塊

S-10北 (56SK010)

須恵器	甕、破片
土師器	甕、甕3

S-10南 (56SK010)

須恵器	甕、坏、坏c、甕1、甕、甕
土師器	甕、皿b、鉢、高台片
	焼塩甕II-b、煎煮土器
土製品	土塊

S-10F (56SK010)

土師器	甕、坏c
-----	------

S-11

須恵器	甕、坏c
土師器	甕、甕3、破片

S-12

須恵器	甕
土師器	坏×甕

S-13

須恵器	坏、甕
土師器	坏、甕
高麗青磁	破片(地胎高麗)
金属製品	鉄釘、不明鉄器
木製品	炭

S-14

須恵器	甕×坏、甕3、不明破片(叩き有り)
土師器	坏a、甕、高台片、坏×甕
金属製品	スラグ

S-15 (56SD015)

須恵器	甕a
土師器	甕、坏、小瓶a(ヘラ)(復入か?)、坏d
瓦	瓦平瓦

S-16

須恵器	破片
土師器	甕、坏d

S-17

土師器	甕、坏
-----	-----

S-18

須恵器	甕3、平瓶、坏
土師器	甕
	焼塩甕
黒色土器A	筒

S-19

須恵器	坏a、甕、甕c、甕×甕
土師器	高台片、甕×坏、甕、高坏?

S-20 (56SK020)

須恵器	坏c、甕1、甕3、甕、小坏c、坏c、高坏、甕c3
土師器	甕、皿b、甕

S-21

須 恵 器	坏c、蓋1、蓋3、蓋、蓋
土 師 器	蓋、破片

S-22

須 恵 器	蓋、坏a、坏c、小蓋、蓋3
土 師 器	坏a、坏d、蓋、破片
	燒磁器

S-23 (56SK023)

須 恵 器	坏c、蓋3
土 師 器	坏a(ヘラ)、蓋

S-24

土 師 器	蓋、坏
-------	-----

S-25 (56SK025)

須 恵 器	蓋
土 師 器	高台片、蓋、丸底坏、柄a
黒色土器A	破片
越州高系青磁	坏:1-2-b
瓦	類 平瓦(斜格子形)

S-26

須 恵 器	蓋3、蓋、蓋、破片
土 師 器	坏a(ヘラ)、蓋、小蓋
備前陶器	胎付(近世)

S-27

須 恵 器	蓋
土 師 器	破片

S-28

土 師 器	柄c、蓋
-------	------

S-29

須 恵 器	坏a、蓋
土 師 器	蓋、柄c、坏
黒色土器A	柄c
黒色土器B	破片
石 製 品	安山岩
瓦	類 平瓦

S-30 (56SK030)

須 恵 器	蓋1、蓋3、蓋c、蓋、蓋
土 師 器	蓋(筑俵産)、把手、蓋c、大皿c、破片
	燒磁器

S-30北 (56SK030)

須 恵 器	蓋、蓋
土 師 器	大皿c、蓋、蓋、大皿、皿(柳城系)、皿b、皿c
	燒磁器1-b、鉢
土 師 器	土塊

S-30南 (56SK030)

須 恵 器	蓋、蓋、蓋1、蓋2、蓋3、坏c
土 師 器	皿b、大皿4、高坏、蓋、大坏c×大皿c、坏a
金属製品	スラグ

S-30Y (56SK030)

須 恵 器	蓋3、坏c、小蓋
土 師 器	大坏c×大皿c、蓋、蓋3、蓋c、蓋、蓋e3
	燒磁器
土 師 器	土塊
瓦	類 平瓦(横目形)

S-31

須 恵 器	蓋
土 師 器	高台片、破片

S-32 (56SK032)

須 恵 器	煎蓋
土 師 器	蓋、皿a
黒色土器A	破片

S-33 (56SK033)

須 恵 器	蓋3、鉢、鉢b
土 師 器	蓋3、破片
瓦	類 丸瓦

S-34

須 恵 器	坏c
土 師 器	蓋、坏a、破片

S-35 (56SK035)

須 恵 器	坏
土 師 器	坏d、蓋4×高坏(1点のみ新、復入?)、蓋

S-36

須 恵 器	蓋3、坏、坏c
土 師 器	蓋(丹波り?)、坏、坏a(ヘラ)、蓋
青 白 磁	合子蓋(1)

S-37 (56SK037)

須 恵 器	柄、柄c、蓋3、蓋c3、蓋、坏
土 師 器	蓋、坏a×皿a
黒色土器A	破片

S-38

須 恵 器	蓋、坏c、蓋1
土 師 器	坏、坏d、蓋
黒色土器A	坏a
黒色土器B	破片
越州高系青磁	柄:1

S-39

須 恵 器	皿a、坏×皿
土 師 器	皿a、蓋、坏a

S-40 (56SD040)

須 惠 器	蓋3、蓋c、蓋、環
土 師 器	瓶c、壺、蓋c、耳a(へろ)
越州窯系青磁	碗; 1? (1)
黒色土器A	破片
瓦	平瓦

S-40下 (56SD040)

土 師 器	壺
-------	---

S-41

須 惠 器	環c、蓋
土 師 器	破片
輸入須惠器	朝鮮系無釉陶器

S-42

須 惠 器	環
土 師 器	蓋、破片

S-43 (56SX043)

須 惠 器	小蓋2、蓋3、環、環
土 師 器	蓋、蓋c、蓋3(黒×高坏?)、高坏、壺、環、

S-44

須 惠 器	蓋3
土 師 器	壺、環×黒
黒色土器A	碗c

S-45 (56SX045)

須 惠 器	壺、環c、蓋c、蓋3
土 師 器	壺、把手、環a、皿a、高台片、小皿a
黒色土器A	碗c、破片
黒色土器B	碗c
越州窯系青磁	碗; II (1)

S-45北 (56SX045)

須 惠 器	壺、環c、蓋1、蓋2、蓋3、蓋4、壺
土 師 器	皿a、皿a2、壺、高台片、環4、小皿a(へろ)、碗c、 環a(イト) (輸入か?)
黒色土器A	碗c
黒色土器B	碗c
越州窯系青磁	碗; I (1)、I-2 (1)
瓦	平瓦(焼目印)、軒瓦瓦、丸瓦(斜格子印)

S-45南 (56SX045)

須 惠 器	壺、壺、蓋、蓋3、蓋4、環c、高坏
土 師 器	環a(へろ)、高台片、壺、碗c
黒色土器A	碗c
黒色土器B	碗c
越州窯系青磁	碗; I (1)、I-2 (1)、II (1)
白	磁筒; I? (1)
繪 輪 陶 器	壺
土 製 品	瓦瓦
瓦	平瓦、破片

S-46

須 惠 器	壺、蓋1、皿a、不明破片
土 師 器	壺、環

S-47

須 惠 器	壺
土 師 器	壺

S-48

土 師 器	破片
-------	----

S-49

須 惠 器	蓋2、蓋3、壺、皿a、環、環c
土 師 器	壺、小皿a?、高台片
瓦	焼破片

S-50 (56SK050)

須 惠 器	環c、高坏、蓋1、蓋3、蓋c、蓋c3、壺
土 師 器	壺、蓋、蓋3、皿、大高坏×皿a
	焼塚壺
金属製品	鉄釘

S-51 (56SD051)

須 惠 器	環a、蓋3、壺
土 師 器	碗c、蓋c、壺、環×黒
黒色土器A	破片
越州窯系青磁	碗; I
瓦	平瓦(焼目印)

S-52

須 惠 器	壺、破片
土 師 器	壺、蓋3、皿b
	焼塚壺

S-53

須 惠 器	小蓋
土 師 器	壺、環、破片?
黒色土器A	破片
瓦	平瓦(焼目印)

S-53下

須 惠 器	壺2
土 師 器	皿、破片

S-54

須 惠 器	皿、小蓋
土 師 器	壺、環
	焼塚壺

S-55 (56SK055)

須 惠 器	環c、蓋3、破片
土 師 器	環 (S-45の混入品か?)、環4、壺
瓦	平瓦

S-56

須 恵 器	壺、坏×皿、皿、坏
土 師 器	皿a、壺、破片
黒色土器A	柄

S-57

須 恵 器	壺
土 師 器	壺、破片
黒色土器A	破片
黒色土器B	破片

S-58

須 恵 器	壺3
土 師 器	小壺、坏

S-59

須 恵 器	壺、皿
土 師 器	坏a(ヘラ)、坏c、皿c×坏c、壺、破片

S-60

須 恵 器	壺×皿
土 師 器	皿
石 製 品	磨輪石、硯石

S-61

須 恵 器	皿、壺、坏、壺
土 師 器	壺、坏

S-62

須 恵 器	坏、壺1
土 師 器	壺、破片
黒色土器A	破片

S-63

須 恵 器	破片
土 師 器	壺、壺、把手

S-64

土 師 器	坏、破片
黒色土器A	坏a

S-65

須 恵 器	破片
土 師 器	壺、轆c (X期? 産入か?)、皿×坏

S-66

須 恵 器	壺、壺1
土 師 器	壺、坏d

S-67 (56SK067)

土 師 器	碗
-------	---

S-68

土 師 器	壺、坏
-------	-----

S-69

須 恵 器	皿a、壺2、壺3、坏
土 師 器	壺、坏、坏

S-70b (56SA070)

土 師 器	破片
-------	----

S-70c (56SA070)

土 師 器	破片
-------	----

S-71

須 恵 器	破片
土 師 器	破片

S-72

須 恵 器	坏c、壺、皿
土 師 器	壺、坏
木 製 品	炭

S-73

須 恵 器	壺
土 師 器	破片

S-74 (56SK074)

須 恵 器	壺1、壺2、坏
土 師 器	壺、破片

S-75

須 恵 器	壺3
土 師 器	高坏、壺、壺3

S-76

須 恵 器	壺、壺、壺3
土 師 器	壺c、坏、壺、高台片
越州陶系青磁 柄; 1	
国産陶器	摺り鉢? (近世)、破片 (近世)
瓦	平瓦 (新)

S-77

須 恵 器	壺、皿、壺
土 師 器	轆c、坏a(ヘラ)
青磁×白磁 破片 (1)	
白	磁轆; VIII (1)
国産陶器	壺? (近世)
物付 (輸入)	破片 (青花) (1)
瓦	平瓦

S-78

傾	意	器	環、環c、短脚
土	師	器	皿、破片
白	磁	器	；IV

S-79

傾	意	器	環
---	---	---	---

S-80a (56SB080)

傾	意	器	環c、環、破片
土	師	器	破片

S-80b (56SB080)

傾	意	器	環、環c、蓋3
土	師	器	破片

S-80c (56SB080)

傾	意	器	環c、破片
土	師	器	環、破片
灰	胎	陶	器 陶 (K14?)

S-80d (56SB080)

傾	意	器	皿
土	師	器	環、破片

S-80e (56SB080)

傾	意	器	環
土	師	器	破片

S-81

傾	意	器	環c、蓋3、蓋
土	師	器	環
西	產	陶	器 破片 (近世)

S-82 (56SD082)

傾	意	器	皿×高環、環、環3
土	師	器	破片
青	磁	小	瓶 (1)
國	產	陶	器 罐与鉢 (近世)
白	磁	皿	；破片 (近世?) (1)
染	付	(輸	入) 小壺 (青花) (1)
國	產	磁	器 破片 (近世)
瓦			類 破片

S-83

傾	意	器	環、環c
土	師	器	破片
高	麗	青	磁 陶；皿
國	產	磁	器 破片 (近世)
染	付	(輸	入) 破片 (青花)

S-84

傾	意	器	環c、環
---	---	---	------

S-85

傾	意	器	環
土	師	器	破片

S-86

傾	意	器	破3
國	產	磁	器 破片 (近世)
染	付	(輸	入) 破片 (青花) (近世?)
土	製	品	土 塊
瓦			類 破片

S-87

傾	意	器	環c
國	產	磁	器 環、蓋3、環×皿
瓦			類 甲瓦

S-88

土	師	器	環、破片
---	---	---	------

S-89

傾	意	器	環、破片
國	產	磁	器 環、破片 (近世)
瓦			類 破片 (新)

S-90 (56SD110)

石	製	品	燐礬石 (マイタクロフ)
---	---	---	--------------

S-91

傾	意	器	環、破片
土	師	器	環、蓋
瓦			類 平瓦

S-92

傾	意	器	環c、蓋
土	師	器	環

S-93

傾	意	器	破片
土	師	器	環、環、破片
木	製	品	炭
土	製	品	燒土塊

S-94

傾	意	器	破片
土	師	器	環、破片

S-95 (56SK095)

傾	意	器	環1、蓋3、環×皿、蓋
土	師	器	環、環
瓦			類 破片

S-96

土	師	器	環
---	---	---	---

S-97

須 惠 器 环e
土 師 器 器c、器

S-98

土 師 器 环a(へう)、器、大环×大器c

S-99

須 惠 器 器、器、器3
土 師 器 器、环a、环、破片

S-100c (56SB100)

土 師 器 器、破片

S-100d (56SB100)

須 惠 器 环
土 師 器 器、破片

S-100e (56SB100)

須 惠 器 环
土 師 器 环

S-101

土 師 器 破片

S-102

須 惠 器 器、破片

S-103

須 惠 器 器、不明破片、破片
土 師 器 器、破片

S-104

須 惠 器 器、环
土 師 器 破片

S-105最下層 (56SD040)

弥 生 土 器 器

S-106

須 惠 器 破片
土 師 器 破片

S-107

土 師 器 破片

S-108 (56SX108)

須 惠 器 器3
土 師 器 破片

S-109

須 惠 器 器、器3、破片
土 師 器 器、环、高台片

S-110 (56SD110)

石 器 器 黑曜石

S-111

須 惠 器 环×皿
土 師 器 破片

S-112

須 惠 器 破片
土 師 器 破片
瓦 器 瓦(縄目印)、平瓦(新)

S-113

須 惠 器 器1
土 師 器 环、器

S-114

土 師 器 器、器、破片
黑色土器A 柄

南東茶色土

須 惠 器 器、环a、环c、器c、器3、器
土 師 器 器、柄c、环a(へう)、高环
黑色土器A 环a
越州麻蒸骨磁 柄; I
国産磁器 破片(近世)
石器 器 滑石
瓦 器 平瓦(縄目印)、瓦瓦(斜格子印)、破片

遺跡上面

須 惠 器 环、器、小器、器、环c、器1
土 師 器 器
杂付(輸入) 破片(青花)(近世)
瓦 器 平瓦(縄目印・新)

灰土

須 惠 器 环c、器3、器
土 師 器 环、器、大环×大器、柄c
黑色土器B 破片
灰 釉 陶 器 破片
白 磁 器 柄; V~VIII
国産磁器 破片(近世)
瓦 器 瓦瓦、平瓦(新)

雑瓦

須 惠 器 器、环、环×皿、破片
土 師 器 器、环a(へう)、环c、器4
黑色土器B 破片
灰 釉 陶 器 柄
杂付(輸入) 破片(青花)(近世)
国産磁器 破片(近世)
瓦 器 瓦瓦(縄目印)、平瓦(縄目印)、破片(縄目印)

Tab.3 大車用糸巻第56次調査
出土土器計画表

A: 内底のナア ○: 有
B: 板状圧痕 ×: 無

56SB080

種別	器種	番号	図版番号	口径	器高	底径	A	B
須	蓋3	-	1 Fig.6	1	-	-	-	-
	坏c	へう	1 Fig.6	2	-	1.1+	7.2	○
	+	-	2 Fig.6	3	-	2.5+	8.0	○

56SK101

種別	器種	番号	図版番号	口径	器高	底径	A	B
須	蓋3	へう	1 Fig.7	1	18.0	1.5+	-	○
	蓋1	へう	1 Fig.7	2	-	1.3+	-	-
	坏	-	1 Fig.7	3	14.2	4.0+	-	-
	皿	-	1 Fig.7	4	15.6	2.8+	-	-
	坏c	-	1 Fig.7	5	-	17.+	10.0	○
	+	へう	2 Fig.7	6	-	3.2+	10.8	○
	+	へう	3 Fig.7	7	-	2.7+	9.6	○

56SK020

種別	器種	番号	図版番号	口径	器高	底径	A	B
須	蓋c3	へう	1 Fig.7	13	14.6	1.9+	-	○
	小坏c	-	1 Fig.7	14	-	2.5+	7.0	-
	坏c	-	1 Fig.7	15	12.4	5.2	9.0	○

56SK030

種別	器種	番号	図版番号	口径	器高	底径	A	B
須	蓋2	-	1 Fig.8	1	-	-	-	○
	蓋3	-	1 Fig.8	2	-	-	-	-
	蓋3	へう	1 Fig.8	3	16.2	1.2+	-	○
	坏c	-	1 Fig.8	4	-	2.5+	-	○
	+	-	2 Fig.8	5	-	3.0+	8.0	-
	+	へう	3 Fig.8	6	11.8	3.8	8.2	○
	土	蓋c3	へう	1 Fig.8	8	13.0	1.6+	-
大蓋4		-	1 Fig.8	9	27.0	2.1+	-	-
坏a		へう	1 Fig.8	10	17.6	4.3	-	○
皿b		へう	1 Fig.8	11	18.2	2.7+	-	-
皿c		-	1 Fig.8	12	22.8	3.4	16.8	-
皿		-	1 Fig.8	13	-	-	-	-

56SK050

種別	器種	番号	図版番号	口径	器高	底径	A	B
須	蓋c	へう	1 Fig.9	1	-	2.1+	-	○
	蓋c3	へう	1 Fig.9	2	13.8	1.5	-	○
	蓋c3	へう	1 Fig.9	3	13.4	1.5	-	○
	坏c	へう	1 Fig.9	4	14.2	4.9	10.0	○
	蓋3	-	1 Fig.9	5	13.4	2.0+	-	○

56SK055

種別	器種	番号	図版番号	口径	器高	底径	A	B
須	坏c	へう	1 Fig.9	7	14.8	2.8	11.2	○
土	坏d	-	1 Fig.9	8	13.0	2.9	6.6	-

56SK067

種別	器種	番号	図版番号	口径	器高	底径	A	B
土	坏	へう	1 Fig.9	9	19.2	5.6	-	○

56SD040

種別	器種	番号	図版番号	口径	器高	底径	A	B
土	碗c	へう	1 Fig.10	1	-	2.3+	7.6	○

56SK023

種別	器種	番号	図版番号	口径	器高	底径	A	B
土	坏a	へう	1 Fig.11	1	13.0	4.1	5.5	-

56SK025

種別	器種	番号	図版番号	口径	器高	底径	A	B
土	碗a	-	1 Fig.11	2	14.0	4.4+	-	-

56SK033

種別	器種	番号	図版番号	口径	器高	底径	A	B
須	蓋3	-	1 Fig.11	5	14.0	1.6+	-	-
	+	へう	2 Fig.11	6	14.8	1.6+	-	○
	土	蓋3	-	1 Fig.11	8	13.4	1.5+	-

56SK035

種別	器種	番号	図版番号	口径	器高	底径	A	B
土	坏d	へう	1 Fig.11	9	14.0	3.1	7.4	-

56SK037

種別	器種	番号	図版番号	口径	器高	底径	A	B
須	蓋c3	へう	1 Fig.11	10	15.2	1.4+	10.9	○
	碗	-	1 Fig.11	11	-	-	-	-

56SK043

種別	器種	番号	図版番号	口径	器高	底径	A	B
須	蓋3	へう	1 Fig.11	12	15.0	1.3+	-	-
土	蓋c	-	1 Fig.11	13	-	-	-	○
	蓋3	-	1 Fig.11	14	18.0	1.3+	-	○

56SK045

種別	器種	番号	図版番号	口径	器高	底径	A	B	
土	小皿a	へう	1 Fig.11	15	10.8	1.0	8.0	-	
	+	-	1 Fig.11	17	12.3	1.5	9.3	-	
	皿a2	-	1 Fig.11	16	11.0	1.1	6.5	-	
	碗c	-	1 Fig.11	18	-	2.6+	9.1	-	
	皿A	碗c	-	1 Fig.11	19	-	3.8+	8.0	-
		+	-	2 Fig.11	20	-	1.9+	8.0	-

56SK106

種別	器種	番号	図版番号	口径	器高	底径	A	B
須	蓋3	へう	1 Fig.11	24	15.0	1.9	-	-

写真図版

本写真図版中の遺物写真右下にある番号は以下のように理解される。

5-2……Fig.5の2番

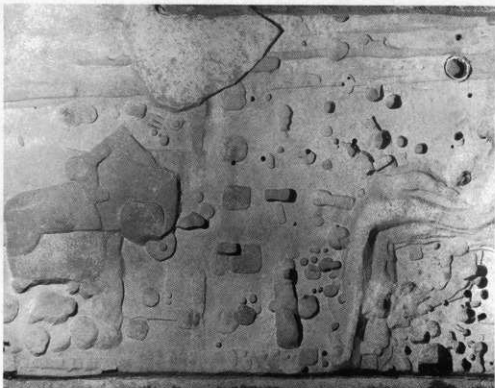
Pla.2



調査区西半部 写真上に56SB080 (空中写真・左が東)



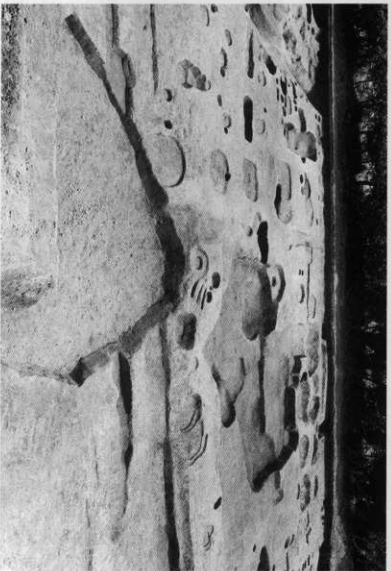
56SB080 (北から)



調査区中央部分 中央に56SB100・56SA070 (空中写真・上が北)



調査区東半部 中央に蛇行するのが56SD110 (空中写真・左が東)



56SB100全景（北から）



56SB100a



56SB100b



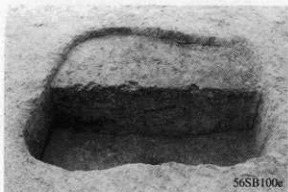
56SB100c



56SB100d



56SB100 柱掘り方断割段階 (南から)



56SB100e



56SB100f



56SB100g



56SB100h

Pla.6



56SB080・56SA070柱掘り方土層観察 (すべて南から)



56SD040・015 (北東から)



56SD040 (左)・015土層観察 (北から)

Pla.8



56SD110 (北から)



56SD110土層観察 (北から)

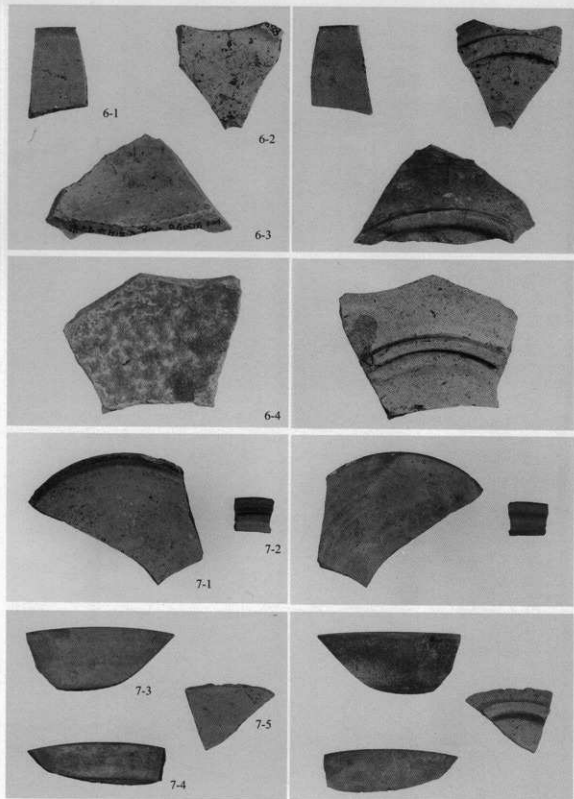


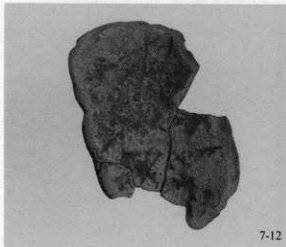
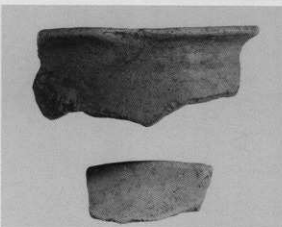
56SK010 (南東から)



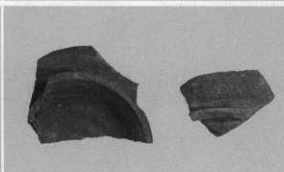
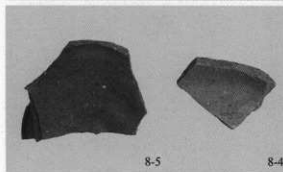
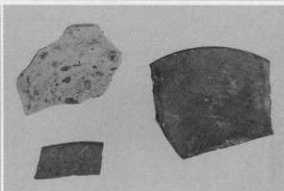
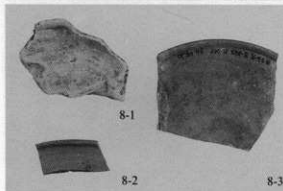
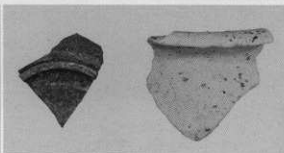
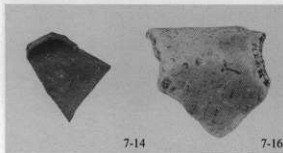
56SK030 (南東から)

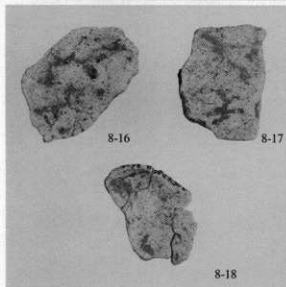
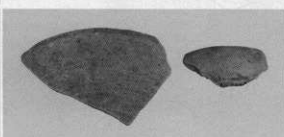
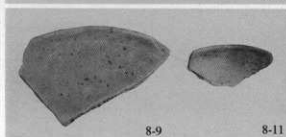
Pla.10



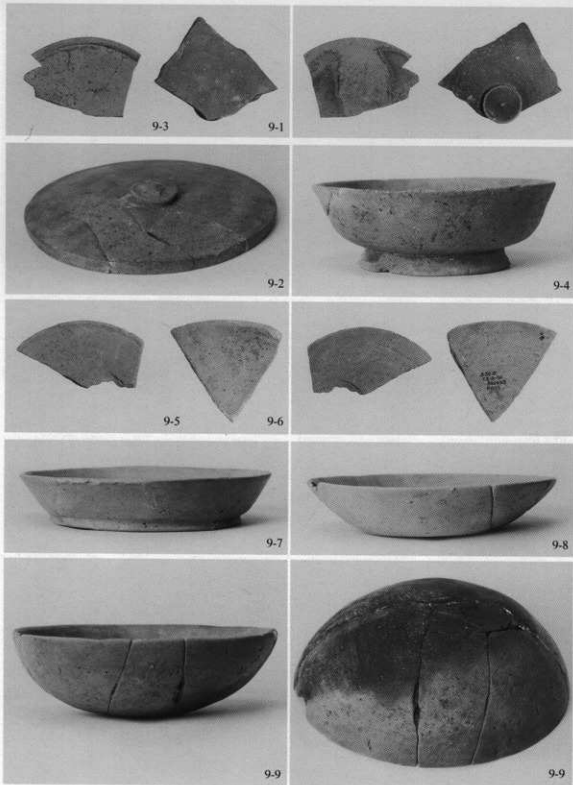


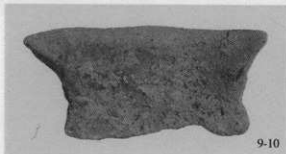
Pla.12



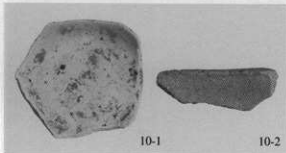


Pla.14



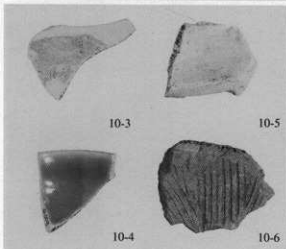
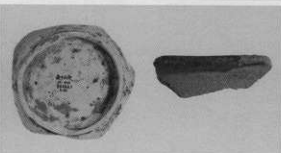


9-10



10-1

10-2

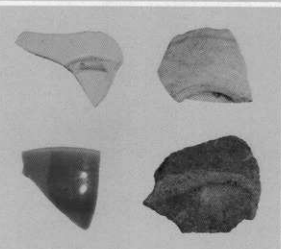


10-3

10-5

10-4

10-6



11-2

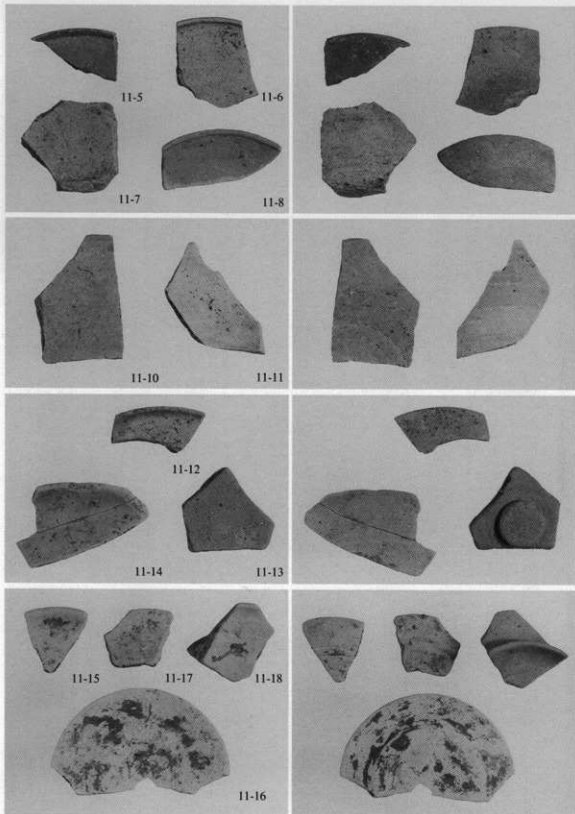


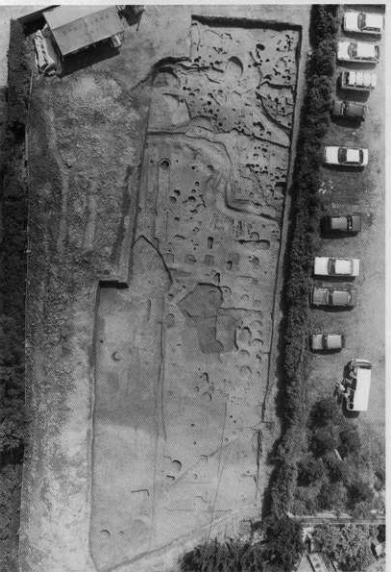
11-3



11-9

Pla.16



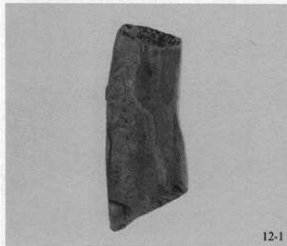
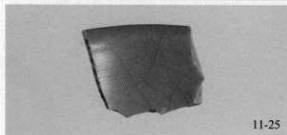
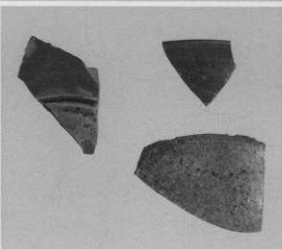
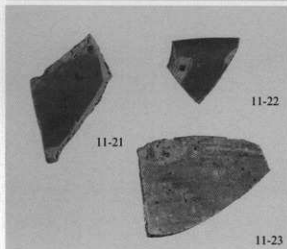
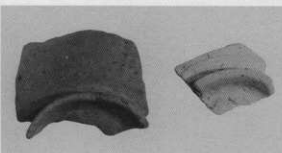
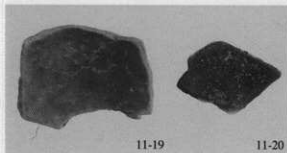


Pl.a.1

西条区全景（空中写真・上北）



発掘調査作業風景



大宰府条坊跡XIII

大宰府市の文化財 第46集
平成11（1999）年3月

編集 大宰府市教育委員会
発行 （教育部 文化財課）

〒818-0101

福岡県大宰府市観世音寺一丁目1番1号

印刷 株式会社 秀巧社
福岡営業所

〒810-0004

福岡市中央区渡辺通り一丁目12-9 フジビル7F